

東南アジア史学会会報 No. 13

昭和 45 年 11 月 14 日

第 8 回 大 会

<発表要旨>

「タイ文化社会の諸問題 —その歴史的素因—」

森 幹男 (東外大・A・A研)

上記の表題のもとに近代タイ文化社会の成立・発展の諸段階を追い、その機能と構造を解明する基本的図式を提示する事により、タイ文化社会の本来的性格を見きわめようとした。あわせて現在のタイ文化社会の内包する多くの問題点を指摘し、その蘇生・革新の可能性についても言及したい。

伝統的タイ文化社会が、今日、社会変革の精神基盤としての活動を、ホーキ・断念したところから来る一般的な社会混乱及び道徳的混乱の現象は、都市部・農村部の区別なく観察する事が出来る。タイ文化社会の現実社会との遊離の問題は、これを外部的規制及び内部的諸制約の両側面から観察する事によって正しい理解が期待されると思う。すなわち、タイ文化社会の自由な発言と行動を規制する外部的压力を、この国の国家理念及び国家目標との関連において考察すると同時に、タイ文化社会の内在特質と基本的内部構造を歴史的に明らかにする作業が並行的に行われるべきであると考える。

(1) タイ文化社会の「貴族伝統」：「王室努力」としてのタイ文化振興の試みは、Wannakhadi Samoson, Samakhom Wannakhadi, Boranakhadi Samoson に代表される各種文化団体の成立と活動をもって開始された。いずれもその性格と内容に於て、貴族文化的であり、また閉鎖的、趣味的、術学的傾向をきわだった特色としている。またタイ文化普及の「國家努力」は、Khanakan-makan Sonsaem Watanatham Pasa Thai (タイ文化・言語振興局) にて、その一例を観る事が出来る。これは言語・文化の普及による国民的連帯と国家的共属の意識の醸成を唯一絶対の目的とした。要するに、貴族社会の威信保持、文化の等質化・平均化による愛国意識の発現を期待する中央権力の意図、この両者により近代タイ文化社会は成立し発展したと言える。

(2) タイ文化社会の「仏教伝統」：タイ仏教の歴史的幸運は、現在、逆にタイ仏教の最大の不幸として解釈される。小乗仏教的倫理・道徳の体系は、これまでタイ伝統社会の秩序の維持に有効に作用し、タイ一般人の日常生活における思考と行動を束縛・規制して来た。この精神基盤の上

に、タイ仏教人の活発な文化活動が展開された。しかし、タイ国近代における急速な社会変化は、タイ仏教のかつての美点と長所のほとんどを、匡すべき欠点へと変えてしまった。社会不適合によるタイ仏教の無力化は、タイ文化社会の重要な側面として在る仏教伝統の基盤そのものを大きくゆるがしつつある。

以 上

〔付記〕 この発表はタイ国日本研究講座（タマサート、チュラロンコン両大学）講師としての二年間（1968—1970）に於ける観察と収集資料に基づく。

上智大学西北タイ山地民族調査報告

白鳥芳郎

昨1969年11月より本年3月末日まで四ヶ月間、上智大学西北タイ歴史・文化調査団（団長白鳥ほか同大学八幡一郎教授、量博満講師、中塚発夫助手、都立大学社会人類学科助手竹村卓二、同大学博士過程在籍比嘉政夫、上智大学学生鄭仁和 計7名）はタイ国西北部チェンライ州、チェンマイ州、タック州などにおいて山地民族の民族学的現地調査を実施した。本調査団の主目的は長年に亘り文献研究によって得た諸成果を実地調査によって再確認することであった。今回の調査のプロジェクトは調査団員各自の専門分野によって次の如く班を分ち、それぞれの調査の役割を分担し、相互に連絡を密に保ちながら能率的に仕事を運ぶよう努めた。

一般項目

- A. 種族史（各種族の起源説話、移住経路、文献、口承による伝承文化財の集拾）
- B. 宗教、儀礼（各主族の崇拜対象、神治伝説、祭祀の形態並び組織、世界觀）
- C. 社会構造（村落組織、家族親族の体系、婚姻体系、土地・財産制度、法的慣行、政治、権力構造）
- D. 経済形態と生活技術（山地（焼畑）、平地（水稻）農業の經營の実態、農林畜産の様式と技術、市場・交易の機構、生業様式と生活用具等物質文化の蒐集と比較）

重点項目

- A. ヤオ族とメオ族の種族的親縁関係並び姓によるその種族系譜及び歴史的背景の探索
- B. ヤオ族の保有する漢文文書・史料の収録、
- C. リス・アカ・ラフなどチベット・ビルマ語系諸種族の種族史と相互間の接触交流の実態

に、タイ仏教人の活発な文化活動が展開された。しかし、タイ国近代における急速な社会変化は、タイ仏教のかつての美点と長所のほとんどを、匡すべき欠点へと変えてしまった。社会不適合によるタイ仏教の無力化は、タイ文化社会の重要な側面として在る仏教伝統の基盤そのものを大きくゆるがしつつある。

以 上

〔付記〕 この発表はタイ国日本研究講座（タマサート、チュラロンコン両大学）講師としての二年間（1968—1970）に於ける観察と収集資料に基づく。

上智大学西北タイ山地民族調査報告

白鳥芳郎

昨1969年11月より本年3月末日まで四ヶ月間、上智大学西北タイ歴史・文化調査団（団長白鳥ほか同大学八幡一郎教授、量博満講師、中塚発夫助手、都立大学社会人類学科助手竹村卓二、同大学博士過程在籍比嘉政夫、上智大学学生鄭仁和 計7名）はタイ国西北部チェンライ州、チェンマイ州、タック州などにおいて山地民族の民族学的現地調査を実施した。本調査団の主目的は長年に亘り文献研究によって得た諸成果を実地調査によって再確認することであった。今回の調査のプロジェクトは調査団員各自の専門分野によって次の如く班を分ち、それぞれの調査の役割を分担し、相互に連絡を密に保ちながら能率的に仕事を運ぶよう努めた。

一般項目

- A. 種族史（各種族の起源説話、移住経路、文献、口承による伝承文化財の集拾）
- B. 宗教、儀礼（各主族の崇拜対象、神治伝説、祭祀の形態並び組織、世界觀）
- C. 社会構造（村落組織、家族親族の体系、婚姻体系、土地・財産制度、法的慣行、政治、権力構造）
- D. 経済形態と生活技術（山地（焼畑）、平地（水稻）農業の經營の実態、農林畜産の様式と技術、市場・交易の機構、生業様式と生活用具等物質文化の蒐集と比較）

重点項目

- A. ヤオ族とメオ族の種族的親縁関係並び姓によるその種族系譜及び歴史的背景の探索
- B. ヤオ族の保有する漢文文書・史料の収録、
- C. リス・アカ・ラフなどチベット・ビルマ語系諸種族の種族史と相互間の接触交流の実態

窮明

D. ホー族(雲南系中国人)の実状並び山地民社会における政治的、社会的、経済的諸面への役割

以上が今回の調査の主目標であったが、それぞれの項目について数多くの成果を得ることが出来た。特にヤオ種族の間に伝えられている移住の記録、「評皇券牒」の発見は大きな収穫であり、かつ山地民族が往来する「山の道」が四通八達に拡がっている事実を確かめることができたこととも彼等の移住経路やその歴史をさぐるために大きな手懸りを得ることが出来た。

コー・ケル遷都による政治権力と宗務家系

石沢 良昭

Angkor期は Jayavarman II (802年)をもって始まり、これに続く諸王は Angkor地方を中心¹に国内統一・内政の整備・領土拡張を主軸にしながら搖ぎなき王権の確立を進めていた。921年に Jayavarman IVは反乱を起こし、王位篡奪および遷都を行なった。世俗的権力の頂点にある王の交代は、王権と密着し、かつ Kamraten Jagat Ta Rāja (Devarāja) 信仰の諸宗務を独占・世襲してきた Givakaivalya 家系にどのような変化を与えたのだろうか? すなわち Givakaivalya の子孫であるけれども正統な Kamraten Jagat Ta Rāja (以下 KJTR と略記) の宗務を継承していない Īcānamūrti が篡位の Jayavarman IVによって新しい宗務者に登用された。この時点において政治・宗教を新しく担当するこの両者は、ともに正統な権力保持者ではなく、Yaçodharapura および Kuti では実現できない旧権力者の否定・系譜の正当化など新しい権威確立に向っての行動であった。つまり、クーデタの結果、国内の政治勢力は Chok Gargyar (Koh Ker) と Angkor に分立した。Harṣavarma I および Īcānamūrti II と共に再び Angkor に在って KJTR の宗務を従前通り執り行なっていた Kumārasvamin は、Vānaçiva の Kanmāvāy (甥) であるが、928年以後はその消息を聞かなくなる。Yaçovarman I の KJTR 祭司 Vānaçiva と兄弟の Hiranyaruci は、KJTR の宗務特權から除外されて Kuti の Sruk (村) より Stuk Ransi の bhumi (土地) に新 sruk を創建して分家した。Īcānamūrti は stuk Ransi から自分の親族を Koh Ker に呼び寄せたという事実によって、Hiranyaruci の系族であることが明らかとなる。この Īcānamūrti は Kumārasvamin と直接的なつながりを持たず、Vānaçiva の cau (姪の息子) であるという点で関係しているにすぎない。それ故、Īcānamūrti は Hiranyaruci が Kuti から Stuk Ransi に連れ出した 2人の姪の息子

窮明

D. ホー族(雲南系中国人)の実状並び山地民社会における政治的、社会的、経済的諸面への役割

以上が今回の調査の主目標であったが、それぞれの項目について数多くの成果を得ることが出来た。特にヤオ種族の間に伝えられている移住の記録、「評皇券牒」の発見は大きな収穫であり、かつ山地民族が往来する「山の道」が四通八達に拡がっている事実を確かめることができたこととも彼等の移住経路やその歴史をさぐるために大きな手懸りを得ることが出来た。

コー・ケル遷都による政治権力と宗務家系

石沢 良昭

Angkor期は Jayavarman II (802年)をもって始まり、これに続く諸王は Angkor地方を中心¹に国内統一・内政の整備・領土拡張を主軸にしながら搖ぎなき王権の確立を進めていた。921年に Jayavarman IVは反乱を起こし、王位篡奪および遷都を行なった。世俗的権力の頂点にある王の交代は、王権と密着し、かつ Kamraten Jagat Ta Rāja (Devarāja) 信仰の諸宗務を独占・世襲してきた Givakaivalya 家系にどのような変化を与えたのだろうか? すなわち Givakaivalya の子孫であるけれども正統な Kamraten Jagat Ta Rāja (以下 KJTR と略記) の宗務を継承していない Īcānamūrti が篡位の Jayavarman IVによって新しい宗務者に登用された。この時点において政治・宗教を新しく担当するこの両者は、ともに正統な権力保持者ではなく、Yaçodharapura および Kuti では実現できない旧権力者の否定・系譜の正当化など新しい権威確立に向っての行動であった。つまり、クーデタの結果、国内の政治勢力は Chok Gargyar (Koh Ker) と Angkor に分立した。Harṣavarma I および Īcānamūrti II と共に再び Angkor に在って KJTR の宗務を従前通り執り行なっていた Kumārasvamin は、Vānaçiva の Kanmāvāy (甥) であるが、928年以後はその消息を聞かなくなる。Yaçovarman I の KJTR 祭司 Vānaçiva と兄弟の Hiranyaruci は、KJTR の宗務特權から除外されて Kuti の Sruk (村) より Stuk Ransi の bhumi (土地) に新 sruk を創建して分家した。Īcānamūrti は stuk Ransi から自分の親族を Koh Ker に呼び寄せたという事実によって、Hiranyaruci の系族であることが明らかとなる。この Īcānamūrti は Kumārasvamin と直接的なつながりを持たず、Vānaçiva の cau (姪の息子) であるという点で関係しているにすぎない。それ故、Īcānamūrti は Hiranyaruci が Kuti から Stuk Ransi に連れ出した 2人の姪の息子

という系譜に一致する。Vāmaçīva は Bhadrapattana の sruk に一人の姪を分家させている。

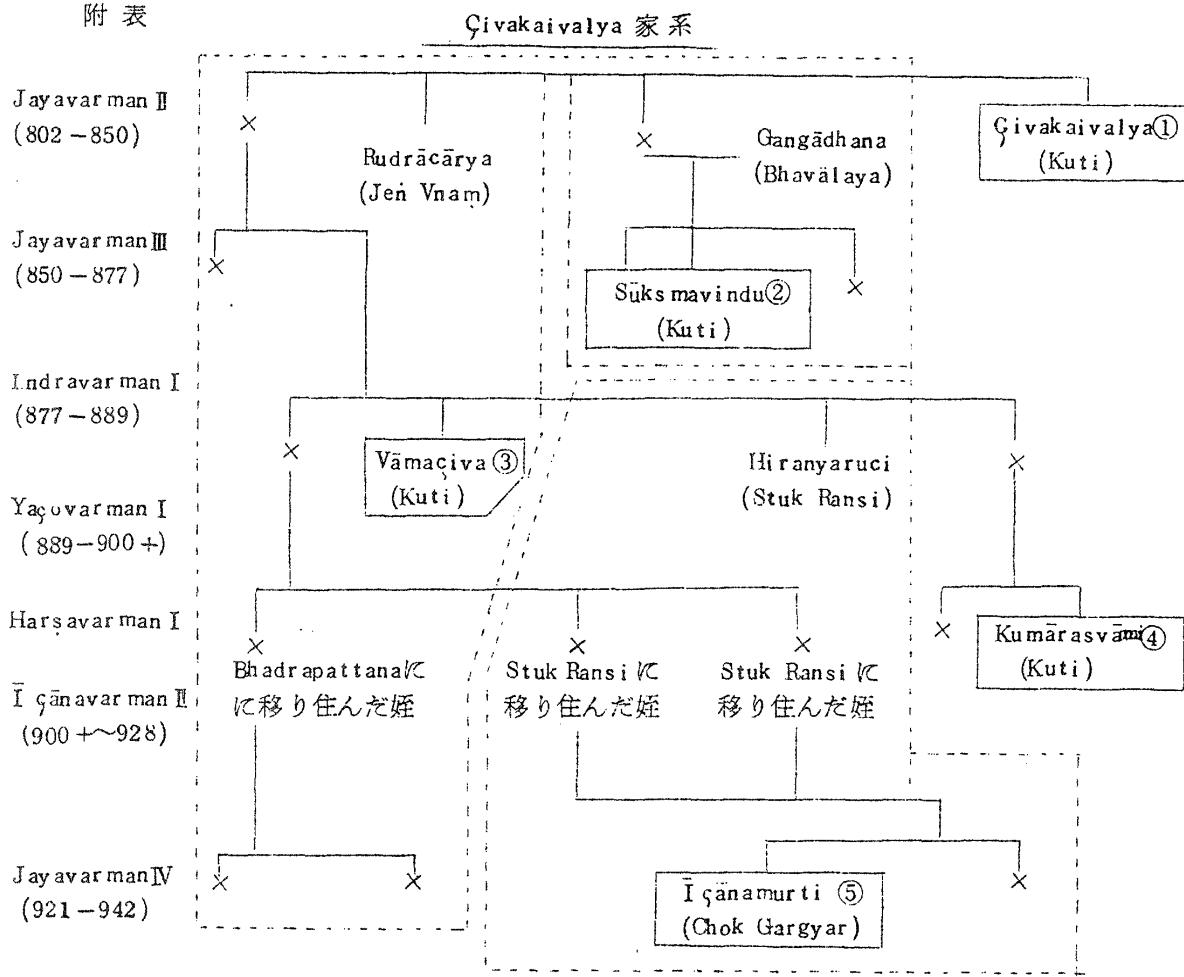
碑文は、これら両 Sruk に分家した系族が、「vnām tel cek mūla syan ta ja smin nā kamraten jagat ta rāja (KJTRの祭司のそれ〔職〕を分与してもらえなかった」と述べている。けれども、同じ碑文の C 面では、「Wrah Pāda Parameçvara (Jayavarman II) は、今後 Kamraten Jagat Ta Rāja の祭司に関して Stuk Ransi および Bhadrapattana の人々の santān (系族) に割り当てた」と言っている。

Jayavarman II の治世に Stuk Ransi · Bhadrapattana の両 sruk は存在せず、それは Yaçovarman I の治下であり、これらの歴史事況を記載した Sdok Kak Thom 碑文の中に内容の矛盾が指摘できる。さらに、KJTR の宗務職を cek (分与) してもらえなかった傍系の両分家が、時代を異にする Jayavarman II から KJTR の宗務を命ぜられることなどはありえない。結局、王位篡奪という非常手段に付隨して KJTR の宗務特権から除外されていた Hiranyaruci - Īçānamurti の分家が、正統の宗務家系となり、以後、Sadāçīva まで続くのである。

さらに碑文を詳解する中で、Sūksmavindu と Vāmaçīva の間には系図上の隔壁が見られる。Vāmaçīva の血縁関係の不明瞭なことは、C. edès 氏および Briggs 氏によって指摘すみであるが、碑文内容の分析によれば、Hiranyaruci と同じ境遇の KJTR の宗務特権から除外された Civak - aivalya の兄弟で「Jeñ Vnam の Visaya」に行った Rudrācārya は、Vāmaçīva との縁故関係を浮彫りにできる。この事実は、Vāmaçīva の系譜を明確にする。これら宗務家系の新 Sruk 建設は、地方への植民につながり、地域開発と無縁ではありえない。

古代カンボジアにおいては、政治権力が王権の世俗的側面を維持し、宗務家系が王権の権威的な背景を形成してきた。Chok Gargyar (Koh Ker) の Prasat Thom 寺院の建立にみられる王の超越した威光は、この地域における経済発展を裏付けると同時に、この建造物に宗教的威厳を吹込んだ宗務家系の社会的影響力を端的に誇示するものであろう。

附表



バタヴィア市の構造

長岡 新治郎

バタヴィア市は人為的な商業都市であった。オランダ東インド会社は1619年荒廃した占領地ジャカトラに、ヨーロッパ的都市の建設をはじめ、アジア貿易の中心地、つまりランデ・ヴー(Rendez-vous)としての発展をこの地に期待した。はじめ会社はオランダ人の移住をはかったが、遠隔の地では多数の人数を送れないので、おのづと現地やアジア諸地域の住民に依存せねばならなかった。ことに現地貿易 (Inlandsche handel) を盛んにしてバタヴィアに物資を集中し、それを蓄積するとともに、その助長策として各国の商人を同地に吸収することによって人口の増加をはかった。そこで最も留意せねばならぬことは、これら居住者を如何に統治するかということ

とで、都市の治安の維持がオランダ支配確立の一つの道であった。

バタヴィアの人的構成は、会社員を頂点として市民（自由民、外国人）解放奴隸（Mardijker）奴隸から構成されていた。各国人よりなる居住者は、各自自らの首長の下に集団を形成し、地域別に居を占め、めいめい自らの風俗習慣を保持していく、都市の居住者としての連帯意識はなかった。要するに従来の東南アジアの港湾都市と内容において大差はなかったと思われる。会社は彼等を統御するためヨーロッパ的な法制度を導入し、司法機関として会社従業員を対象としてバタビア城最高法院（Ordinaris Raad van Justitie）を設置し、法律事務官（Fiskaal）に会社員の監督をゆだねた。一方一般の民事事件のためには 市参事会（College van Schepenen）を裁判機関とし、これに市政運営をも兼ねさせた。この参事会は会社員、自由民、外国人によって構成されたが実権は会社員の手中にあり、検事としての職は法律執行官（Bailjuw）がこれにあたった。これが職務を遂行するさいには、行政官である区長（Wijkmeester）の補佐をうけ、また市の膨脹とともにあって警察隊長（Landdrost）がおかれるなど都市居住者は会社の厳重な統制、監視のもとにおかれ、都市への出入りも自由はなかった。

東南アジアの都市の地域構造

別技篤彦

東南アジアの都市に地理学的立場からアプローチするには種々な方法があるが、ここでは住民の構成 — それが現実に居住する都市の地域構造を中心として述べたいと思う。東南アジアの社会全体に共通ないわゆるブルラリズムは都市においても歴史的に現われ、今日までその大きな特色となっている。それは起源的にみて内陸部の土侯国の都市、海岸の商業都市、さらに近世のヨーロッパ植民都市のいずれについても、居住民の占拠地域に関して共通な特色として指摘されるのである。地域構造については古代から都市内部を住民の社会階層で区割する一つの基本的パターンがあったが、それはやがて都市の発達に伴う外来諸民族の流入にさいしても地域的集団居住を形成させることになった。アメリカのギーアツの近著 “Social history of an Indonesian town” (1965) に示された東部ジャワのモジョクート町の例は、現代においてもかかる民族的集団居住のプロセスがいかに起るかを発生論的に示したものとして興味深い。一国内の小都市でさえ、自律的に出身地、職業、身分などによる分離居住が形成される慣行なのである。

こうしたパターンを東南アジアの歴史的な都市について調査してみるとマラッカを始め、バン

とで、都市の治安の維持がオランダ支配確立の一つの道であった。

バタヴィアの人的構成は、会社員を頂点として市民（自由民、外国人）解放奴隸（Mardijker）奴隸から構成されていた。各国人よりなる居住者は、各自自らの首長の下に集団を形成し、地域別に居を占め、めいめい自らの風俗習慣を保持していく、都市の居住者としての連帯意識はなかった。要するに従来の東南アジアの港湾都市と内容において大差はなかったと思われる。会社は彼等を統御するためヨーロッパ的な法制度を導入し、司法機関として会社従業員を対象としてバタビア城最高法院（Ordinaris Raad van Justitie）を設置し、法律事務官（Fiskaal）に会社員の監督をゆだねた。一方一般の民事事件のためには 市参事会（College van Schepenen）を裁判機関とし、これに市政運営をも兼ねさせた。この参事会は会社員、自由民、外国人によって構成されたが実権は会社員の手中にあり、検事としての職は法律執行官（Bailjuw）がこれにあたった。これが職務を遂行するさいには、行政官である区長（Wijkmeester）の補佐をうけ、また市の膨脹とともにあって警察隊長（Landdrost）がおかれるなど都市居住者は会社の厳重な統制、監視のもとにおかれ、都市への出入りも自由はなかった。

東南アジアの都市の地域構造

別技篤彦

東南アジアの都市に地理学的立場からアプローチするには種々な方法があるが、ここでは住民の構成 — それが現実に居住する都市の地域構造を中心として述べたいと思う。東南アジアの社会全体に共通ないわゆるブルラリズムは都市においても歴史的に現われ、今日までその大きな特色となっている。それは起源的にみて内陸部の土侯国の都市、海岸の商業都市、さらに近世のヨーロッパ植民都市のいずれについても、居住民の占拠地域に関して共通な特色として指摘されるのである。地域構造については古代から都市内部を住民の社会階層で区割する一つの基本的パターンがあったが、それはやがて都市の発達に伴う外来諸民族の流入にさいしても地域的集団居住を形成させることになった。アメリカのギーアツの近著 “Social history of an Indonesian town” (1965) に示された東部ジャワのモジョクート町の例は、現代においてもかかる民族的集団居住のプロセスがいかに起るかを発生論的に示したものとして興味深い。一国内の小都市でさえ、自律的に出身地、職業、身分などによる分離居住が形成される慣行なのである。

こうしたパターンを東南アジアの歴史的な都市について調査してみるとマラッカを始め、バン

タム、アユタヤ、バタビア、マニラ、シンガポールなど何れの場合でも明瞭にあとづけることができる。これらについては多くの古地図や史料が利用できるが、特に植民都市の場合には民族的集団居住地区の形成は統治にとっても有利な形態であった。

このような歴史的発展をふまえた上で、現在の東南アジアの都市についてはどのような研究が行なわれているかを次に述べたい。一つは都市内部の民族的居住地域についての具体的な構造分析であり、たとえばシンガポールのメトロポリタン・エリアについて民族別の「集心度」(Centralization) の分析がみられる。これは市の発達に伴い、最初民族別に割当てられた地域から生じてきた住民のモビリティーの調査で、バージェスの同心円的理論を利用して興味ある結果が示されている。典型的な複合都市クアラルンプールについてもマライ人、中国人、インド人、イギリス人などの居住地区について住民の職業構成や生活水準の差異などが分析されている。また華僑の多いペナン島のジョージタウン市では内部のいくつかの地区をとり（たとえば広東出身者の密集地区、福建出身者のそれ、あるいは両者の混合地区など）その各戸について多数の項目の調査を行なって各地区の「社会的格づけ」(Social grading) をきめたごときである。こうした内部構造の地域的分析は近年のいわゆる「社会地理学」の発展につれて今後さらにさかんに行なわれるものと予想される。あるいは戦後東南アジアの大都市を特色づけているいわゆる「不法占拠者」(Squatter) による都市景観の変化などもとりあげるべき問題となろう。これらを含めて東南アジアの都市の社会・経済・文化的エコロジーを地域的に分析することは今後の重要な研究テーマである。

バンコク

河部利夫

(1) バンコク成立の由来の1つは、王権の座としての政治的首都である。対岸のトンブリー朝(1767~82)の後をうけて、今日の場所に首都をひらき現チャクリー朝を創立したのは、ラーマ1世プラ・ブッタ・ヨート・ファー・チュラーロック(在位1782~1809)である。新都はビルマよりの侵攻に対し、メナム・チャオピアを擁して防衛上有利な作戦的選択に由る。同時に、新都にクルシングテープにはじまる長い名称がふせられた如く、アユタヤ朝の首都 Ayudhaya の再現とし、神聖なる王権の座としての意義が強調されたのである。今日、この首都は正式にはクルシングテープとよばれ、バンコクは俗称である。

タム、アユタヤ、バタビア、マニラ、シンガポールなど何れの場合でも明瞭にあとづけることができる。これらについては多くの古地図や史料が利用できるが、特に植民都市の場合には民族的集団居住地区の形成は統治にとっても有利な形態であった。

このような歴史的発展をふまえた上で、現在の東南アジアの都市についてはどのような研究が行なわれているかを次に述べたい。一つは都市内部の民族的居住地域についての具体的な構造分析であり、たとえばシンガポールのメトロポリタン・エリアについて民族別の「集心度」(Centralization) の分析がみられる。これは市の発達に伴い、最初民族別に割当てられた地域から生じてきた住民のモビリティーの調査で、バージェスの同心円的理論を利用して興味ある結果が示されている。典型的な複合都市クアラルンプールについてもマライ人、中国人、インド人、イギリス人などの居住地区について住民の職業構成や生活水準の差異などが分析されている。また華僑の多いペナン島のジョージタウン市では内部のいくつかの地区をとり（たとえば広東出身者の密集地区、福建出身者のそれ、あるいは両者の混合地区など）その各戸について多数の項目の調査を行なって各地区の「社会的格づけ」(Social grading) をきめたごときである。こうした内部構造の地域的分析は近年のいわゆる「社会地理学」の発展につれて今後さらにさかんに行なわれるものと予想される。あるいは戦後東南アジアの大都市を特色づけているいわゆる「不法占拠者」(Squatter) による都市景観の変化などもとりあげるべき問題となろう。これらを含めて東南アジアの都市の社会・経済・文化的エコロジーを地域的に分析することは今後の重要な研究テーマである。

バンコク

河部利夫

(1) バンコク成立の由来の1つは、王権の座としての政治的首都である。対岸のトンブリー朝(1767~82)の後をうけて、今日の場所に首都をひらき現チャクリー朝を創立したのは、ラーマ1世プラ・ブッタ・ヨート・ファー・チュラーロック(在位1782~1809)である。新都はビルマよりの侵攻に対し、メナム・チャオピアを擁して防衛上有利な作戦的選択に由る。同時に、新都にクルシングテープにはじまる長い名称がふせられた如く、アユタヤ朝の首都 Ayudhaya の再現とし、神聖なる王権の座としての意義が強調されたのである。今日、この首都は正式にはクルシングテープとよばれ、バンコクは俗称である。

(2) バンコクとはむしろ、今日でもトンブリー市街の北と南にそれぞれバンコク・ノーアイ（小バンコク）、バンコク・ヤイ（大バンコク）のクローラング（運河）名がある如く、往時はトンブリー側の地区の名称であった。バン(bang)とは小辺の集落をさし、コーク(kok)とは wild plum (Spondias Pinnata) の1種といわれる。

ケンブフェルは「今日バンコクとよばれるところは大河メナムの西岸にあった云々」とし、ド・ラ・ルーベールもその地図の中で、西岸に記している。チュラロンコン大学のロン教授はIAHAの香港会議(1964)のリポート(The City of Bangkok)の中で、バンコクはすでにアユタヤ朝の創始者ラーマ・ティボディー1世(在位1350~69)によって第2の首都として建設された(1350)とし、プラチャイ王(在位1534~46)によって屈曲したもっとも狭いところに運河が掘られ、マハーチャクラバット王(1549~69)の治世にはトンブリーとして知られていた場所にまでひろげられたが、ヨーロッパ人は古い名称をすてようとしたと説明している。ともあれ、ナライ王(在位1656~88)のころには、にぎわいをきわめる商港として栄え、トンブリー(バンコク)にはルイ14世の訪使節団の後、ピチャイ・プラスィー(Vijai Prasi)と名づける砲台がフランス兵によって守備されたことがある。

(3) 以上によってわかる如く、いわゆるバンコクは、今日バンコク=クルラングテープとされている誤用は認めながらも、政治と経済の二つの機能をもった首都であることを、その発生史の中で理解することができるものといえよう。誤用は奇しくも、この首都の二重性格をみごとに端的に示している。

[インドの都市 — とくにインド・ムスリムの都市形態]

飯塚キヨ

イスラーム教徒のインドへの進出はローマ帝国崩壊後、ペルシャやイランにおいて商工業が発達した時に遡れる。アラビヤやエジプトの商人達はインドの諸港に独立的港市を形成し、イスラームの自治社会をつくっていたといわれる。宗教的進出はそれより遅れ、12世紀後半頃からスルフィー達がインドへやってきて布教活動を始めるようになってからである。都城を築き政治的にインドを支配するようになるのは、13世紀初頭 デリーにイスラームの独立政権が樹立されてからである。16世紀中葉にはほど全インドにイスラームの支配が及ぶようになり、インド支配の拠点として城塞や都城が形成された。都市の発達がみられるのは政治的経済的にイスラーム

(2) バンコクとはむしろ、今日でもトンブリー市街の北と南にそれぞれバンコク・ノーアイ（小バンコク）、バンコク・ヤイ（大バンコク）のクローラング（運河）名がある如く、往時はトンブリー側の地区の名称であった。バン(bang)とは小辺の集落をさし、コーク(kok)とは wild plum (Spondias Pinnata) の1種といわれる。

ケンブフェルは「今日バンコクとよばれるところは大河メナムの西岸にあった云々」とし、ド・ラ・ルーベールもその地図の中で、西岸に記している。チュラロンコン大学のロン教授はIAHAの香港会議(1964)のリポート(The City of Bangkok)の中で、バンコクはすでにアユタヤ朝の創始者ラーマ・ティボディー1世(在位1350~69)によって第2の首都として建設された(1350)とし、プラチャイ王(在位1534~46)によって屈曲したもっとも狭いところに運河が掘られ、マハーチャクラバット王(1549~69)の治世にはトンブリーとして知られていた場所にまでひろげられたが、ヨーロッパ人は古い名称をすてようとしたと説明している。ともあれ、ナライ王(在位1656~88)のころには、にぎわいをきわめる商港として栄え、トンブリー(バンコク)にはルイ14世の訪使節団の後、ピチャイ・プラスィー(Vijai Prasi)と名づける砲台がフランス兵によって守備されたことがある。

(3) 以上によってわかる如く、いわゆるバンコクは、今日バンコク=クルラングテープとされている誤用は認めながらも、政治と経済の二つの機能をもった首都であることを、その発生史の中で理解することができるものといえよう。誤用は奇しくも、この首都の二重性格をみごとに端的に示している。

[インドの都市 — とくにインド・ムスリムの都市形態]

飯塚キヨ

イスラーム教徒のインドへの進出はローマ帝国崩壊後、ペルシャやイランにおいて商工業が発達した時に遡れる。アラビヤやエジプトの商人達はインドの諸港に独立的港市を形成し、イスラームの自治社会をつくっていたといわれる。宗教的進出はそれより遅れ、12世紀後半頃からスルフィー達がインドへやってきて布教活動を始めるようになってからである。都城を築き政治的にインドを支配するようになるのは、13世紀初頭 デリーにイスラームの独立政権が樹立されてからである。16世紀中葉にはほど全インドにイスラームの支配が及ぶようになり、インド支配の拠点として城塞や都城が形成された。都市の発達がみられるのは政治的経済的にイスラーム

ム勢力が安定するようになった17世紀に入ってからのことである。一方ヨーロッパ商人のインド進出もあり、ヨーロッパの市場構造の変化もあってやがてイスラーム商人にとって代るようになったヨーロッパ商人は港市を形成し、漸次インド内陸部へと進出してゆき、インドの社会に大きな影響を及ぼすようになっていった。19世紀にはイギリス勢力が完全にイスラーム政権にとって代り、インドの都市に変化がみられるようになった。

都市はムスリムのインド支配の拠点であった。インドのムスリムは主として都市に住んだ。都市社会は支配者を中心とする戦士氏族集団を都市の中核とし、彼らに従属しながら生活する人々と、商人や手工業者などの寄寓部族とから構成されていた。軍事的なインド支配から大規模な植民地支配となってからも、統治機構は武人による中央集権的官僚政治に始終するものであったから都市社会に占める軍隊組織の役割は絶対的なものであり、さらにまた産業は王侯貴族や商人の雇用職人であるティトウルギー手工業者が基盤であったことなど、インド・ムスリムの都市社会構造が都市パターンを決定していた要因でもあった。

インド・ムスリムの都市には類型がみられる。しかしその都市社会は雑多な人種の複合体なのであって、単一民族によるものではない。イラン人またはペルシャ人、トルコ・モンゴル系の民族、アフガン人、アラブ人、インド人のムスリム、インド化したムスリムなどから構成されている複合体なのであり、それらがコラーンによってイスラーム教徒としての單一体として結合されていたのである。彼らにとってコラーンは精神の支柱であり、生活の中心をなすものであったから、ジャーミ・マスジット（大集会教会堂）は宗教センターであると同時に都市センターであり、都市生活は王宮とジャーミ・マスジットを中心として回転されていた。これらは都市の核であり、都市形成に際してまずこの二つが設計の主点とされた。都市設計に当って次に大切なエレメントはキャラヴァン・サラーアー（隊商用旅舎・インドにおけるものは国営の大建築物で、都心に配置された。）やバーザールであった。これらはショッピング・センターであり、情報交換の場であり、娯楽の場でもあった。特權階級の庭園や庭園墓地のほかにイード・ガーナ（イードの祭りを行う場所）および移民集団居住地区、サラーアー（旅舎）などは、郊外地区を構成する施設であり、都市の発展に伴いそうしたエレメントと主要城門を結ぶ街道筋周辺に都市のスプロール現象がみられる。都市形成に際して特別な庭園のために都城内の広いスペースが取られた例は新しく都城を建設したところにみられる。

インド・ムスリムが必要としたそうした都市施設の建築パターンや施設配置にはイスラーム文化の伝統を固持する態度が強く現れており、そこにインド・ムスリムの文化形態を伺い知ること

ができる。

D・ファン・ホッヘンドルプの
「バタビヤ領土の現状報告」について
(1799)

田淵保雄

DIRK VAN HOGENDORP (1761~1822)は第四次英蘭戦争(1780~84)後の東インドの防衛のため海兵士官としてジャワに赴いた。この戦争は英仏抗争の一環とみなされるものである。彼の戦略体系は親仏抗英の上にたち、これは彼の生涯を通じて変わることはなかった。現地に到着して彼はオランダの東インド政策が破局に瀕していることを発見する。しかし彼の初期の思想においては東インド会社の存在は絶対的なものであり、彼は会社による東インド支配を否定する考えをもたなかつた。

1787年より2年間、彼はベンガルにある会社商館の商務員としてインドに赴き、当時急速に変化しつつあるイギリスのインド支配を具体的に見聞した。イギリスは1784年の「インディア・ビル」により会社の支配を廢して国家による直接統治の方向に進んでいた。史家はこの動きを「植民政策におけるルネッサンス」と呼んでいる。地税徴収権と同時に統治権と裁判権を実質的に土侯から奪取せんとする計画は総督コンウェレスによって更に推進された。吾々はこれを「植民政策の合理化」と呼びたいと思う。ホッヘンドルプはこれらのイギリス新統治政策に接してこれをジャワに移入せんとしたのである。

1792年の弟あての書簡において彼は始めて会社の存在そのものを否定した。その後94年の書簡及び96年の「計画案」によって彼は自説を展開する。これらは土侯を通ずる間接支配を廢してオランダ国家による直接支配を提案したものである。1799年の「報告」によって彼の改革案は体系化されて本国の人々に直接提示されることとなつた。本書は以後「自由主義的植民政策の祭壇」の役割を果すことになる。当時の会社の幹部は「従順な土侯」の存在をジャワ統治の「守護神」と考えていたから彼の唱えるベンガル方式が採用される見込みはなかつた。総督シベルフと総督ヴィーゼが「報告」に対して反論を発表している。彼はラフルスによるジャワ統治と同じ政策を実施しようとしたのである。両国の国力を考えると、オランダがイギリスと同じことをすることは無理であった。つまりイギリスは産業革命により植民地に与えるべき商品をもつていなかつたが、オランダにはそれがなかつた。彼は軍事的には反英強硬派に属していたが、政治経済的にはイギリス方式に従つた。この点彼は小国オランダの困難な国際的地位を象徴している。

ができる。

D・ファン・ホッヘンドルプの
「バタビヤ領土の現状報告」について
(1799)

田淵保雄

DIRK VAN HOGENDORP (1761~1822)は第四次英蘭戦争(1780~84)後の東インドの防衛のため海兵士官としてジャワに赴いた。この戦争は英仏抗争の一環とみなされるものである。彼の戦略体系は親仏抗英の上にたち、これは彼の生涯を通じて変わることはなかった。現地に到着して彼はオランダの東インド政策が破局に瀕していることを発見する。しかし彼の初期の思想においては東インド会社の存在は絶対的なものであり、彼は会社による東インド支配を否定する考えをもたなかつた。

1787年より2年間、彼はベンガルにある会社商館の商務員としてインドに赴き、当時急速に変化しつつあるイギリスのインド支配を具体的に見聞した。イギリスは1784年の「インディア・ビル」により会社の支配を廢して国家による直接統治の方向に進んでいた。史家はこの動きを「植民政策におけるルネッサンス」と呼んでいる。地税徴収権と同時に統治権と裁判権を実質的に土侯から奪取せんとする計画は総督コンウェレスによって更に推進された。吾々はこれを「植民政策の合理化」と呼びたいと思う。ホッヘンドルプはこれらのイギリス新統治政策に接してこれをジャワに移入せんとしたのである。

1792年の弟あての書簡において彼は始めて会社の存在そのものを否定した。その後94年の書簡及び96年の「計画案」によって彼は自説を展開する。これらは土侯を通ずる間接支配を廢してオランダ国家による直接支配を提案したものである。1799年の「報告」によって彼の改革案は体系化されて本国の人々に直接提示されることとなつた。本書は以後「自由主義的植民政策の祭壇」の役割を果すことになる。当時の会社の幹部は「従順な土侯」の存在をジャワ統治の「守護神」と考えていたから彼の唱えるベンガル方式が採用される見込みはなかつた。総督シベルフと総督ヴィーゼが「報告」に対して反論を発表している。彼はラフルスによるジャワ統治と同じ政策を実施しようとしたのである。両国の国力を考えると、オランダがイギリスと同じことをすることは無理であった。つまりイギリスは産業革命により植民地に与えるべき商品をもつていなかつたが、オランダにはそれがなかつた。彼は軍事的には反英強硬派に属していたが、政治経済的にはイギリス方式に従つた。この点彼は小国オランダの困難な国際的地位を象徴している。

「報告」に書かれている若干の項目を紹介する。ジャワの政治形態、土侯、会社法、防衛と軍制、地税、輸出入税、賦役と強制出荷制、中国人問題、米、コーヒー、胡椒、海運、棉、阿片、林業と造船、砂糖、銅、金、バタビヤ、塩、東インドにおける貿易、喜望峰、セイロン、ベンガル、スマラッタ、コロマンデル海岸、モルッカ群島、アンボイナ、バンダ島、日本貿易、中国貿易、などである。

本書は大きな反響をよび、彼に対して可成の反対者が本国においてもあらわれた。その中心人物はネーダーブルフである。彼はこれらの反論に対して「小論集」と「詳細を説明」を発表する。

「報告」が戦闘的性質をもっているのに対して、これらの論集は説得的である。

総括

市川 健二郎

総括討論を進めるために、以上の諸発表をつきの三大項目に分類して時代順に討議したい。

I 伝統的基層文化、生活圏の拡大

1. 初期の王城とシヴァ神、ヴィンヌ神。神聖な王権とリンガ崇拜、山神、須彌山思想。王城の規模と水管理、農業生産。大乗仏教の影響。王城と農村の定期市場圏の拡大。インド文化と中国文化の影響。
2. 小乗仏教と三宝崇拜。法の守護者国王の王都。イスラム諸王国の初期の王都。

II 西欧との接触とその反応

1. 16世紀の港町とアジア商人、海岸都市と内陸都市。商業と農業。
2. 17、18世紀の港町。人種別統治と華商社会。居住区と社会階層。都市労働力と人頭税。

III 複合社会の階層変化、中央と地方の格差

1. 19世紀後半、20世紀始の社会変化。

西欧文明および貿易の拡大と都市社会変化。植民地下の都市の指導階層。伝統的居住区からの人口拡散と商業発展。

2. 新興独立国の都市知識層。職業分化。
3. 国家統一と地方都市。地方都市の構造。

中央と地方との対立関係。都市への人口流入と地域格差。新都市（ペタリンジャヤ）の性格。華商社会。中流階層の未発展。

昭和44年度収支決算報告

(昭44.11.1～昭45.10.31)

I 収入の部

会員会費収入	100,000
利 息 収 入	242
寄 付 金	27,000
雑 収 入	4,000
前年度繰越金	8,172
合 計	139,414

II 支出の部(事業費目別)

大会運営費	38,469
会報刊行費	43,275
研究会費	1,400
委員会費	1,640
事務運営費	12,295
合 計	97,079

III 差引残高

(次年度繰越金) 42,335

以 上

ユトレヒト留学記

田淵保雄

岩生氏、中村氏の推せんをえて、1967年から68年までユトレヒト大学で勉強する機会をえた。

オランダ本国ではすでにインドネシアに対する関心はうすらいでいる。ライデン大学では、インドネシア史研究は「東洋学」の中に包含され、その担当者は軍事史の研究者によって辛じて維持されている。アムステルダム市立大学においても社会学者が担当し歴史家による研究は行われていない。

ただユトレヒト大学だけは、ヘレットゾン以来の実証的学風を保持し、コールハース氏をえたことによってインドネシア研究をつづけている。彼の手によって従来のオランダにおける同研究は集成された。この方面の勉強をしようとするものは誰でも先づ彼の "A CRITICAL SURVEY OF STUDIES ON DUTCH COLONIAL HISTORY" (1960) によって資料と文献の所在を知らなければならないだろう。一昨年彼は定年退職し目下古文書の整理とその要約書の作成に余生をかけて努力している。彼の長期にわたる健在を吾々は祈っている。なお、コール

ハース氏の学位論文は1815年から30年までのオランダのインドネシア支配の変遷に関するものである。

私が直接指導をうけたのは彼の後継者であるファン・デル・ヴァル氏である。彼は教授就任式において、ユトレヒトの伝統をたやすく保持してゆくことを表明した。彼の研究分野はインドネシアにおける教育制度である。目下彼は第二次大戦前夜の日蘭交渉に興味を示している。永積氏が彼と接触をもっていることを私は彼から直接にきいた。助手や学生達の中には本格的にインドネシア史を研究するものはいないようである。この点に関し、吾々は将来ユトレヒトもライデンと同じ道をとるのではないかと懸念する。

先日の私の発表の内容をファン・デル・ヴァル氏に伝えたところ、日本の東南アジア研究において、D・ファン・ホッヘンドルブが紹介されたことを嬉しく思っているという内容の手紙が私の手元に到着している。

(1970.10.3)

ブノンベンー 東京のあいだ

中村悠子

3月19日(木) 朝6時頃外に出てみる。太陽は昇り始め、街はいつもと変わらない。シクロ(輪タク)は行き交う。街角に並ぶ露店で新聞を買う。仏語紙は、ロン=ノル首相の声明の形でしか昨日のシハヌーク失脚を報じていないが、クメール語紙「ノーコー・トム」は、92対0のシハヌーク元首不信任決議を出した国会のようすも報じている。諸情勢の悪化を懸念し、プサー・トゥマイ(いわゆる中央市場)で食料品を買いこんだ。数箇所の入口に警備する制服姿が見られたが、それ以外に変ったようすはない。街の店々、マガザンデタ(国営マーケット)でさえ、シハヌークの肖像を掛けていた。王立クメール大学人文学部(通称「サンクム大学」1階)からの帰途、小型タクシーバスの中で、同乗のカンボジア人たちは、あれこれ喋っているのだが、おばさんがひとり、「サムダ・アゥ(父なる親王の意、シハヌーク殿下を指す)が病気だから、代理の人が元首になった」と言ってきかせていた。一般大衆の解釈としては、これが当然かもしれない。

3月20日(金) 「多くの教師を殺害したりして言論を統制し、自分は国民から金を搾り取ってスイス銀行に巨富を貯えていたシハヌーク。貧しい人々に彼が施したといっても、もともと人民から徴った金ではないか。今、彼を解任し、人々は皆喜んでいる。」——クメール語の授

ハース氏の学位論文は1815年から30年までのオランダのインドネシア支配の変遷に関するものである。

私が直接指導をうけたのは彼の後継者であるファン・デル・ヴァル氏である。彼は教授就任式において、ユトレヒトの伝統をたやすく保持してゆくことを表明した。彼の研究分野はインドネシアにおける教育制度である。目下彼は第二次大戦前夜の日蘭交渉に興味を示している。永積氏が彼と接触をもっていることを私は彼から直接にきいた。助手や学生達の中には本格的にインドネシア史を研究するものはいないようである。この点に関し、吾々は将来ユトレヒトもライデンと同じ道をとるのではないかと懸念する。

先日の私の発表の内容をファン・デル・ヴァル氏に伝えたところ、日本の東南アジア研究において、D・ファン・ホッヘンドルブが紹介されたことを嬉しく思っているという内容の手紙が私の手元に到着している。

(1970.10.3)

ブノンベンー 東京のあいだ

中村悠子

3月19日(木) 朝6時頃外に出てみる。太陽は昇り始め、街はいつもと変わらない。シクロ(輪タク)は行き交う。街角に並ぶ露店で新聞を買う。仏語紙は、ロン=ノル首相の声明の形でしか昨日のシハヌーク失脚を報じていないが、クメール語紙「ノーコー・トム」は、92対0のシハヌーク元首不信任決議を出した国会のようすも報じている。諸情勢の悪化を懸念し、プサー・トゥマイ(いわゆる中央市場)で食料品を買いこんだ。数箇所の入口に警備する制服姿が見られたが、それ以外に変ったようすはない。街の店々、マガザンデタ(国営マーケット)でさえ、シハヌークの肖像を掛けていた。王立クメール大学人文学部(通称「サンクム大学」1階)からの帰途、小型タクシーバスの中で、同乗のカンボジア人たちは、あれこれ喋っているのだが、おばさんがひとり、「サムダ・アゥ(父なる親王の意、シハヌーク殿下を指す)が病気だから、代理の人が元首になった」と言ってきかせていた。一般大衆の解釈としては、これが当然かもしれない。

3月20日(金) 「多くの教師を殺害したりして言論を統制し、自分は国民から金を搾り取ってスイス銀行に巨富を貯えていたシハヌーク。貧しい人々に彼が施したといっても、もともと人民から徴った金ではないか。今、彼を解任し、人々は皆喜んでいる。」——クメール語の授

業で、教師の L 氏は語った。18日朝から絶たれていた電信の機能が回復したというので、夕方局まで行き、無事を報せる東京への電報を打つ。窓口には局員がひとりいるだけだが、内部は兵が占拠し検閲をおこなっているという。局の前左手に戦車一台。ここ暫くシン＝ヴァー氏（元首相）を中心としたモニック派に対する汚職糾弾国会を連日報道していた新聞は、きょういよいよ本格的に反シハヌークキャンペーンを開始した。ペトコンから賄賂を得てカンボジア領内にはいることを認め、自分は世界で7位の富豪にのし上がったという悪口を書いた新聞を、人々は争って買い読んでいる。モニック妃がペトナムとイタリアとの混血で、この妃に誣かされたシハヌークがカンボジア国をペトコンに売った——というのである。

3月29日（日）在留邦人 I 氏の車にクメール人の門番と共に乗せてもらい、郊外へ出てみた。ポート・チエントン方面へ。3月23日から再開していた空港はまだ閉鎖され、兵が何人かで守っていた。付近に検問所がひとつ。そのほかドラム缶を白く塗って路のあちこちに堰のようにして置いてあるので、まるで障害物競争の如くコンポンスブーへの道を走る。田舎道は、何事も無いかのように静かで、人通りも車も少かった。プノンペン市内へ引返すと、ワーウー気勢をあげている若者たちを満載したトラックに出遭ったので、追って行く。兵士志願者たちだ。まだ15才くらいに見える少年も多い。手を振り声を挙げ、人々にデモンストレーションをしていた。北方のコンポンチナンの訓練所へ向かうのかと噂していたが、市街を抜けて西方へ進路をとっていった。このあたり路傍に待機の兵が多い。再び市内のモニヴォン通りを南下し、モニヴォン橋（サイゴンへ通じる国道一号線がメコン河を渡る所。通称サイゴン橋）を渡る。昨日は通行止めだったというが、きょうは橋を越えてまもなく検問所があり、自動車のトランクの中を調べられた。そして国籍を尋ねられ遠くへ行かぬように念を押されて通行を許された。同行の門番はすっかり緊張してしまったようだ。コキを通り過ぎ、ある寺院にはいり若い僧に質問してみた。「木曜日（26日）デモがあちら（プノンペンと逆方向）から来た。車70台程の勢で、『チェイヨー サムダチ、アウ（シハヌーク殿下万歳）』と叫んでいた」と語ってくれた。コキの町まで戻り、街角の屋台で氷水をする男の人尋ねてみると、警戒の目で私たちを見、「自分はプノンペンから来たばかりで」と、何も語ろうとしなかった。そこで、近くの理髪店のおじさんに訊くと、「木曜日の明け方4～5時頃、100台近い車が通った。むこうからプノンペン方面へデモが進み、ここから間もない所で政府側と衝突、発砲。死傷者が出たが、デモの連中で仲間を運び去ったので人数はわからない。町の人々は怖くて戸を鎖し、未だに御飯も喉を通らない」という。平静のうちに定着するかに装っていた新政権を脅かす徵は、26日頃から目出っている。コキの事件とは

別に、コンポンチャムから発生したデモ隊が、プノンペンにはいろうとしてサンクム橋近くで政府側と衝突し、双方に死者が出たことが報じられている。26日夜7時半頃、シクロの集りのようないつも一団が、ホッホッと聞える大声をあげながらプノンペン市の中心に動いて行くのを、私は見た。あれもシハヌーク支持のデモだったらしい。

3月30日(月) 朝7時頃大学へ着くと、カーキ色の服装に身を固めた学生たちが構内に集っていた。銃を持つ者もあった。いよいよ若者たちが戦いに駆り出されるのかと思い、胸が詰まる。クメール語の授業に於ける同級生(北朝鮮の4人とソ連のふたり)はこのところ姿を見せないので、独りで受講した。この時間中、軍用機が東方から西方へ一機飛んで行った。「ああ不穏だ」と教授のS氏は言う。「もうベトコンはプノンペンから30Kmの所まで来ている。ベトコンは、ベトナムで米軍に勝ち目がなくなったので、弱いカンボジアに攻めて来ようとしている」と……U教授の歴史の時間、人文学部の教官が一名新政権反対表明の廉で捕えられたことを、女子学生たちが小声で噂していた。

4月11日(土) 共和制樹立のための大集会が競技場でおこなわれた。私の室からは飛行機の旋回して飛ぶ音と子供たちがワーッと囁かれてている声が聞えた。アパートの屋上に昇ってみると、市の上空からビルを撒き散らしているのだった。拾って見せてもらったビルには、「クメールと領土を守れ」と記されてあった。午後、友人V嬢が遊びに来た。人文学部で日本語などを学ぶ傍、国営の商工事務所に勤めていたのだが、5000リエル近かった月給が3000リエルに下げられたので、退職したという。軍事費の増大のため、公務員は管理職の外は減俸になったそうだ。プノンペンの西部トゥールコークでは昨夜撃ち合いがあったというし、爆破未遂事件もあったりして、市内も緊張度を増している。昨夕から午後6時以降のベトナム人外出禁止。今夕から、市内道路添いの家々は夜間電灯を点け放して道を照らすようにと言いわたされた。街は、夜になると二輪車の往来が全く無く(これも禁令が出ているので)、電灯が人通りのない路をじっと照らし続けている。

4月21日(月) 大学では、多くの教室が兵営と化している。今月初め、例年より早く仏曆新年の休暇にはいってから、男子学生は軍事教練を受け、女子学生は炊事を担当して朝から夕まで忙しかったようだ。昨日、学部事務長が、教練と授業を並行させる方針を発表したので、休暇が明けたことになった。そして、大学の正門の出入りに学生証を呈示せねばならなくなつた。学生が交代で銃を持って門を衛っているのだが、別の学部学生を「ベトコン」と早合点して発砲する事件もあった。

5月2日(土) 先日、日本船がメコン河で砲撃を受けたため、同航路を予定通り日本へ帰るかどうかがわからない。しかし、今後船が新たに来る見込みはないから、もし船便を送るなら今のうちだ。昨夜晚くまでかかって荷造りした書物の包みをシクロで郵便局まで運び、発送した。カンボジア赤十字のことを書いたシハヌーク行政の本など2冊が、税関で没収されたが、シハヌーク作曲集の楽譜はパス。

5月4日(月) 予防接種を受けるため生物学研究所へ行った。ここ正門は、鎖されている鉄柵がその都度番兵の手で開けられ、人がはいる。日本国パスポートを見せて、やっと入れてもらえた。黒襦子のズボンなどを穿いた女、神経質そうな白い顔の男—— ごちゃごちゃたまつて注射の番を待っている。オレンジ色のカンボジア国籍者注射証明書が、机上に山と積まれていた。ベトナム系カンボジア人が、こんなにも大勢ベトナムへ帰ろうとしているのか。日本人だという理由で特別扱いを受け早く注射を済ませた私も、暗澹たる気持で門を出、日本大使館へ向かった。大使館の前は黒山の人。ベトナム系住民たちである。スピーカーを使い、熱気を帯びて何か話している。異様な雰囲気。南ベトナムの領事事務を日本大使館でおこなっているため、ベトナム帰還を望む者が連日ここに押しかけているのだ。

5月6日(水) 「ペトコン」プノンペン市内潜入がしきりに伝えられ、昨日、午前11時以降翌朝7時までのベトナム人外出禁止が発表された。先日から、夜間軍用機の飛び回る音が聞え、昨夜は深更2発の銃声を聞いた。米地上軍のカンボジア領進攻のニュース、日本人を含む報道関係者その他の地方での受難の報に接し、在留邦人が次第に引揚げや避難の方向に動き出している。一方、クメール語の新聞は、このところ共産圏の悪口と自由主義国特に米国や日本の賞讃に忙しい感がある。プノンペン市を斜めに横切る道路「毛沢東通り」を「リチャード=ニクソン通り」と改名しよう—— という記事に苦笑させられた。

5月14日(木) 大学で、日本語講座の学生T君に会った。クラチエ省出身の彼は、自分の故郷が共産側に占拠され、現在家族と音信不通なのだと言う。新年の4月12~16日に帰省した時は、人々は怖がって外出しなかったために静まりかえっていたが、何事も起っていなかったのだが—— 心痛を表さず穏やかに語っていた。帰還者を載せたベトナム船が昨日出帆し南ベトナムへ向かったニュースもある一方、一度共産側に陥ったネックルーンの奪還成ってカンボジア政府側は有頂天になっているようすもある。この戦果は南ベトナム軍の活躍によるものだと言われているが、クメール語の新聞には、写真を沢山載せて米軍の有能さを宣伝している。そしてカンブチヤ・クラオム(通称カンブチヤクロム。南ベトナム在住のクメール人で、厳しい軍事訓練を

経ている者が多い)のことも。すなわち、ベトナム人との協調をなるべく伏せておきたいロン=ノル政府の意向らしい。

× × × × ×

優しくてのんびり屋さんで、人なつこくてうっかりしていて——どこまでも人の好いナイーヴなクメールの人々……。「昔、われわれの国は今より強大であった」と表紙に記されたクメール語のインテリ月刊誌「フーナン」や、国家クメール語化委員会を中心とするクメール語化運動などと共に、このクメール人たちの間で漸く健やかに民族的自覚が起り、知的な論議も盛んになろうとしていたのを、この間まで私は見届けていた。プノンペンに国立モン・クメール研究所が設置され、地理・歴史・言語文学・芸術・民族・風俗習慣の各分野における研究活動も始まろうとしていたのだった。しかし、長い間受動的であった民族の歴史の殻である社会科学不在は、今、この人たちが現代の世界に於ける不幸を一身に背負うことには拍車をかけた。

緊張と不安の高まる中で、5月中旬まで授業が続いた大学へ通い、図書館へ通った私も、6月2日遂に1年2ヶ月のプノンペン生活に別れを告げた。そして既に3ヶ月を経ようとしている今、開封され「検閲済。北ベトナム及びベトコン帝国主義者らに侵略されたる」という朱色の印を捺されて届く手紙は、空路僅か7時間のプノンペン—東京間の距離が無限に遠いことを感じさせる。

——「現在僕は官立航空学校で毎日訓練を受けています。将来きっと有能な隊長となるために。T君は選抜試験に不合格で、僕はひとりでバッタンバンに来ました。彼からは便りが途絶えました。この前まで僕たちは、大学の廊下で談笑しあっていた。あの頃、食べる米がなくて苦しんだり死んだりしたクメール人を、ひとりでも見ましたか。そんなことはない。誰もが歌い踊り、大いに食べ笑っていました。クメール人はクメール人として、風俗を保ち宗教を守り、いつも楽しく生きていたいのです。コミュニズムを持ち出す必要はないのです。コミュニズムは、貧しい国自由のない國のものなのだ。以前から、暴君シハヌークのために苦しむ人がいた。そして今、彼はわれわれをコミュニズムへと強制している。われわれは新しく國を建て直したいのに。彼は、アメリカが侵入してきてカンボジアを滅ぼすと言ってわれわれを欺いた。でも、プノンペンにひとりでもアメリカ人がいましたか。僕はくやしくてたまらない。ベトコンを紛碎するために、同胞と共に闘います。政治のことばかり書いて申し訳ありませんでした。でも僕は、日本の新聞記者たちのような解釈をしてほしくなかったのです。お元気で。(バッタンバンにて 8月23日)」

最近のインドシナ旅行から

高橋保

去る6月末から7月末までの一ヶ月間、筆者は南ベトナムを振り出しにカンボジア、タイ、ラオスの4カ国を廻ってきたので、その際の見聞の二、三をここに御報告しておきたい。

(イ) プノンペンの近況

筆者が一年振りにカンボジアの首都プノンペンに到着したのは7月中旬のことであった。シアヌーク国家主席を解任・追放した政変から4ヶ月たち、北ベトナム軍や南ベトナム民族解放戦線軍を主体とした共産軍側によるプノンペン攻撃説が流れ飛んだ6月中旬に比べると、この当時のプノンペンの空気はかなり和らいでおり、在住者の話でも、市内要所の検問にも、ひと頃のようなきびしさがなくなったと云われていた。

プノンペンの市街も、従前この国が平和であった時代とほとんど同じくその美しさ、清潔さを保っていたが、目立って多くなった軍服姿や町中の要所、官庁附近などに哨所が設けられ、砂袋を積み上げてつくられた銃座から機関銃が街頭をにらんでいることなどから、この町が戦時下、しかも戒厳令下にあることを実感させられるのであった。3月の政変までは人口60万だったプノンペンも、相次ぐ地方からの避難民をかかえてこの当時すでに90万近くに膨れ上っていた。10月末現在では150万にも増大しているという。こうした避難民の中には、筆者の旧知のカンボジア人・中国人・日本人家族達も幾つか混っており、戦争の悲惨さを改めて身近かに思い知らされた。

当時、プノンペン市民の日常生活も一応平静さを維持しており、またその周辺での戦闘もあまりなく、先月に比べて情勢はたしかにロン・ノル政権側にとって改善され一まず崩壊の危機を脱した様にみえたが、実際には周囲を包囲した目に見えぬ共産側からの圧力を感じながら無気味に静まりかえっているというのが、プノンペンの偽らざる実情であったといえる。こうした状態は現在でもさして變っていないようである。

最近のカンボジアの戦局は實に混在し切っており、地方への旅行には身の安全が保証されないとくに外国人のプノンペンからの外出は危険である。これまで外人記者が日本人を含めて25人も行方不明になっているという異常な事態がそのことをよく反映している。つい最近もさらに2名の記者が殺害されるという事件が発生し、被害者に日本人が含まれていたこともあって、我國

民に多くの衝撃を与えたことは記憶に新たらしいところであろう。かくして筆者も残念ながら今回は地方への外出を諦めざるをえなかった。

(口) インドシナの文化財

カンボジアのロン・ノル政権は10月7日、共和国宣言を行ない、11月1日付をもってこの国は王制から共和制に移行し、国名も「クメール共和国」と称されることになった。2,000年にわたる長い王制の伝統をもつこの国で、この共和制が根づくにはなおかなりの長期間を必要とするであろうことは疑いない。

ところで、この共和制移行に伴なって、従来この国で最も特色ある文化団体として華々しい活動を続けてきた「王室舞踊団」はその名を「国立舞踊団」と変えて、今後とも活動を継続することになった。ワット・ブノムの広場で行なわれた共和制移行の祝典においても早速この舞踊団が登場して民衆の拍手を浴びている。ともあれ、これでカンボジアの最も貴重な歴史的文化財の一つが失なわれずに済んだことはまことに喜ばしいことであると思われる。

現在この国で、その維持・保存が憂慮され、世界中挙げて強くその保護が叫ばれている歴史的文化財は何といってもアンコール・ワットであり、またその周辺に広がるアンコール・トムを始めとするアンコール王朝時代（9世紀初頭—15世紀初頭）の遺跡群である。6月初頭以来この遺跡群のある地域は戦場となり、アンコール・ワットなどは共産軍側に占領されているらしい。何しろこの地域への接近は現在不可能なので、詳しい実状は判らない。今次の筆者のブノンペン滞在中にも、シェムレアップからアンコール・ワットに向ったフランス人記者5人が行方不明になつたため、ブノンペンの外人記者の間では、改めてこの地域に対する危機感が高まつていた。

筆者は今次の旅行では、中部ベトナムのユエをも訪れ、かつて全ベトナムに君臨したグエン王朝の居城だった王城趾を見学する機会をもつたが、4年振りにみたその姿はあまりにも荒廃しきっていた。1768年のいわゆるテト（旧正月）攻勢の際、共産軍側はこの王城趾に21日間立籠って、アメリカ軍や南ベトナム政府軍との間に激しい戦闘を展開したのである。かつて華麗さを誇った内城の正門の一部が崩れ、また内城の土壁などに砲弾の跡と思われる大きな穴があちこちに空いているなどは、その戦闘の名残りに他ならない。

今差当って望まることは、このユエ王城の修復を急ぎ、アンコール・ワットをしてその二の舞にさせないことである。インドシナの歴史的文化財はまさに保存の危機に直面しているといわざるをえない。